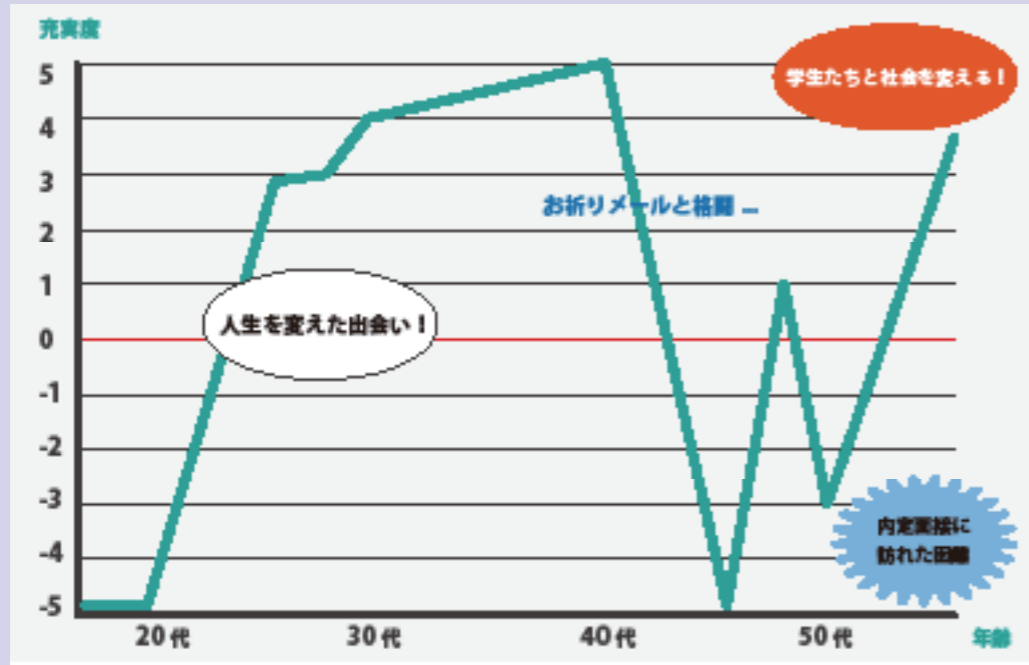


瓜生原キョウジュの人生グラフ



PROFILE

うりゅうはら ようこ
瓜生原 葉子
 同志社大学商学部准教授
 専攻：組織行動論
 ソーシャルマーケティング

始まりは親子との出会い

福祉の仕事をしてきた父親の影響で、高校時代は医学部志望だった瓜生原キョウジュ。しかし大学受験に失敗し、グラブはどん底からのスタート。滑り止めの薬学部に進学する。本当に行きたい学部ではなかったため勉学は疎かになっており、これといった目的意識もいまま教授に紹介された製薬会社に就職。就活らしいことはせず、内定は1日で決まったという。入社後は臓器移植を受けた患者の拒絶反応を抑える薬品の研究開発を担当。1年経過したある日、オーストラリアで肝移植を受けた1歳の男の子とその両親に会う機会があった。渡航移植の苦労や現実を聞きに赴いたはずが、父親から「この子が元気になったのはあなたの薬のおかげです。本当にありがとう。日本でも移植が受けられるような社会を実現できるように、頑張ってください」と、涙ながらに強く手を握られた。この瞬間から、瓜生原キョウジュの人生は一変した。瓜生原キョウジュの本来の目的は「人の命を救うこと」。この目的は、医師にならなくても叶えられる。瓜生原キョウジュは大学時代ほとんどなかった薬学の勉強を再開。患者の生の声も積極的に聞きに行き、見違えるような熱血社員へと進化した。そして28歳になるとブランドマネージャーに昇進。当時の男性優位社会においてかなり革新的な大抜擢だったが、それも瓜生原キョウジュの不断の努力の成果だった。

海外勤務で気づかされた日本の課題

多くの人が日本で移植手術を受け

人生最大の選択

医学の当たり前が通用しない学問に苦戦しつつも、今まで触れたことのない学問に出会うことの大切さを学んだ瓜生原キョウジュ。大学院は仕事と両立しながら通っていたが、43歳の時、人生の岐路が訪れる。「このまま製薬会社で働き続けるのか?それとも研究の道に進むのか?」選択の決め手は、黒人医師アーネスト・ダルコーのドキュメンタリー。彼はエイズ撲滅のため医学を修めるも、貧困地域では医療技術以前に治療を受けるシステムが整備されていないことに気づく。そのため彼は経営学を学び、ビジネスの力でエイズを激減させた。瓜生原キョウジュは医師にこそなれなかったが、彼のように仕組みを変えることで多

▽臓器移植啓発の日「グリーンリボンデー」を広めるため、京都タワーを緑色にしたことも。瓜生原キョウジュ自身の豊富な社会経験を生かしたゼミ活動は今もとどまることを知らない。



就活地獄の先に待っていたもの...

多くの命を救いたい、と考えたのだという。もう一つのきっかけは、瓜生原キョウジュと同じくバリバリの仕事人間だったとある友人。彼女は乳がんになり職を失ってしまっても、その後はがん患者の就活を支援する事業を展開し、自分のような人を増やさないように日々努力していた。瓜生原キョウジュも、彼女のように自分にしかなできない社会事業に没頭し、よりよい世の中を作ろう、と決意した。半年間もの葛藤を経て、瓜生原キョウジュが出した答えは、20年以上勤めた製薬会社を辞め、研究者として生きることに決めた。

学生たちと社会を変える!

失意のどん底に突き落とされ、研究もストップしていた瓜生原キョウジュを支えていたのは、「社会の役に立ちたい」という思いだった。医学部のない同志社大学では、難解な医

学的な研究が評価され京都大学のプロジェクトに携わることになる。その後同志社大学で無事内定を得て、ようやくグラフも元に戻り始めた。しかし、そんな安心もつかの間、瓜生原キョウジュの父が末期がんで余命数カ月と発覚。そのうえ、瓜生原キョウジュもがんの宣告を受けてしまった。入社直後に休んではいけないという思いから、自分の置かれた状況は周囲に隠していた瓜生原キョウジュ。自身は長期休暇の直前にひっそりと手術を受けて早期に退院した。休み明けは合併症に苦しみながら実家の広島で父の看病と認知症の母の介護、そして京都での大学の仕事を並列して行なった。無理がたたった瓜生原キョウジュが過労で倒れたしまった翌日、父の意識はなくなっていた。

学の知識を扱うことは難しい。そこで瓜生原キョウジュは、そんな医療業界と一般社会のギャップを埋め、専門知識のない人々でも医療分野に接しやすくなる方法の研究を始めた。そして5年前の秋には人生初のゼミを開設。学生と同じ目線で、ゼミ生とともに社会課題に取り組んでいく中で、「若者と協働して社会貢献し、父に誇れる生き方をしよう」と心に誓った。日本はドナーが少ない、といっても、臓器提供をしないという意思を表示している人が多くわけではない。それ以前に国民の約9割が意思の表示すらしておらず、瓜生原ゼミではこのことに着目している。ドキッとした人がいたら免許証や保険証の裏側を見ていただきたい。「するも」しなないも自由だが、人々が多様な問題について考え、話し合い、意思表示することが当たり前になる世の中。それは、あの親子に出会った時から瓜生原キョウジュが願っていたやまない社会である。